

ドイツ兵捕虜が伝えたサッカーの高度な試合テクニック

7月12日午前4時10分過ぎ、東京四谷四丁目の藤井もとゆき選挙事務所に歓声が上がりました。「藤井もとゆき 当選確実」のテロップが流れた瞬間です。平成19年の参院選挙、逆風の中、12000票余を伸ばしながら当選ラインに届かず涙を飲んでから3年、リベンジの成った瞬間でした。

その同じ時間帯、テレビはFIFAワールドカップ2010、南アフリカ大会の、スペイン対オランダの決勝戦を放映中でした。試合は、0対0のまま規定のゲーム時間を終了、延長戦にもつれ込み、スペインが決勝点を挙げて世界の座を獲得しました。ワールドカップは、スポーツに形を変えた「世界戦争」だと誰かが言いましたが、マスコミが伝える世界各国の熱狂ぶりを見ていると、まさに実感です。

このワールドカップで、わが日本代表チームは、大会前は劣勢を噂されながら見事に予選を突破し、世界16強に勝ち残りました。そして決勝リーグ第一試合で、パラグアイと互角に渡り合い、惜しくもPK戦で敗れました。日本チームの活躍に日本中が感動、国民皆がサッカーファンになってしまったかのよう。日本のJリーグもこれからますます人気が上がっていくでしょう。

さて、日本に、いつサッカーが入って来たのか、正確にはわからないようですが、明治29年(1896年)には東京高等師範学校に蹴球部(フットボール部)が作られ、その後日本各地の師範学校、中学校に蹴球部が作られ交流試合が始まり、全国に広まっていたようです。

ところで、日本サッカーに、欧州の高度なサッカーテクニックが初めて紹介された大変興味深いエピソードがあります。(以下、東京未来大学 岸本肇教授「在日ドイツ兵捕虜のサッカー交流とその教育遺産」を参考にさせていただきました。)

1914年から1918年にかけて第一次世界大戦が勃発しました。日本は、ドイツ兵5000人が守る中国山東半島の青島の要塞を英軍とともに攻め、降伏させました。そして大勢のドイツ兵を捕虜とし、久留米、板東(徳島)、似島(広島)、青野原(兵庫)、名古屋、習志野(千葉)などの捕虜収容所に収容しました。その収容期間は1914年11月から1920年3月まで約5年半という長い期間に及びました。

これだけ長い捕虜生活でしたが、ハーグ陸戦条約という国際法により戦争捕虜の虐待は禁じられており、軍部は強制労働などをさせませんでした。そこで、ドイツ兵達は退屈をしのぐために、いろいろなスポーツを始めました。その熱心さを、当時の俘虜情報局が、「実に、彼ら俘虜の運動癖と読書癖は、国民性の長所とも称すべき美点であり、我が国人の採りて学ぶべきことたるべし」と、記録しているそうです。中でも、ドイツ兵が好んだのはサッカーで、やがて、似島、青野原、名古屋などで日本の高等学校、中学校などとの交流試合が行われるようになりました。

1919年1月26日には、似島収容所のドイツ兵チームと、広島高等師範学校(高師)、同付属中学校、広島県師範学校(県師)、広島県立第一中学校のチームとの試合が行われ

ました。結果は高師チームは0対5、県師チームは0対6で完敗だったそうです。また、青野原のドイツ兵との最初の交流試合は、1919年7月13日、たまたま捕虜達が遠足の途中、兵庫県立小野中学校校門で休憩したことから試合が行われることとなったそうです。結果は、日本側が0対6、0対8などで完敗でした。

似島のドイツ兵チームと対戦して、その高度なテクニックに驚嘆した高師チームの主将、田中敬孝は、その後も毎週のように島に渡り、技術指導を受け、やがて、日本サッカーのリーダーの一人となりました。ソーセージ、バウムクーヘンなどのドイツ文化を広めたのも、これらドイツ兵捕虜であったそうです。

それから100年余り、日本サッカーは、ワールドカップの決勝リーグに勝ち残る程の強い力を持つようになりましたが、その陰にはこのような心温まる歴史があったのですね。

私も人に負けないサッカーファン、自分の選挙結果と同じくらいスペイン対オランダの決勝戦が気になって仕方がありませんでしたが、それはさておき、日本代表チームからもらった感動と、全国の調理師の皆様からいただいた熱い御声援を力に、これからの参議院議員としての6年間、国民のため、日本のためがんばります。

追記 日本調理師連合会、故則武康夫会長様には、5年の長きにわたり「味感」に拙文の掲載をお許しいただいたのを始め、本当に厚いご支援を賜りました。今回の私の当選の喜びをご生前にお伝えできませんでしたこと、本当に残念でなりません。心より感謝を申し上げ、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。